

正齒音二等字の音韻變化と一、三の問題

佐藤 昭

一 はじめに

中古中國語(中古音)に、「齒音」とよばれる一群の聲母がある。この「齒音」のもとに分類される聲母は、全部で十五種あり、その内譯はつぎのようになっている。⁽¹⁾

舌尖音 ts ts' dz s z
 捲舌音 ts ts' dz s z
 舌面音 ts ts' dz s z

中國の傳統的な音韻學の用語では、右の三種は、それぞれ「齒頭音」「正齒音(二等)」「正齒音(三等)」とよばれている。また「正齒音(二等)」「は」「齒上音」とよばれることもある。

さらに、これら三種の「齒音」聲母と、中古韻母との結合關係をみてみることにしよう。中古韻母は、韻圖の分類法に従って、「一等韻」「二等韻」「三等韻」「四等韻」の四種とする。これらは、周知のように、「二等韻」だけが拗音の韻母(i介音を含む)をもち、ほかはみな直音の韻母(i介音を含まない)をもつものである。それらと各種「齒音」聲母との結合關係は、次表のようになっている。

一等韻 二等韻 三等韻 四等韻

ts系	○	○	○	○
ts'系	/	○	○	○
dz系	/	/	/	/
s系	/	/	/	/

表中の○印はその結合が存在することを示し、/印はその結合が存在しないことを示す。

以上は「齒音」聲母の分類に関する簡単な説明であるが、右に挙げた三種のうち、音韻史的にみてもっとも興味深いのは、第二種のもの、すなわち「正齒音二等」の漢字であろう。というのは、この系列の漢字は、中古音期以降、ほかの「齒音」字にはみられない、各種の特徴的な音韻變化を發達させてきたからである。

その變化のもっとも著しい例が、韻母における主母音/e/→/a/の變化である。これは、中古音の段階で、韻母に/e/ないしその系統の主母音をもつものが、のちに/a/の主母音をもつものに轉じたというもので、「衰」shuai、「色」shaiなどが、そのように變化した漢字の代表的な例である。本稿で考察の對象にしようとするのは、つまり、このような特異な音韻變化をとげた正齒音二等の漢字にほかならない。

ところで、正齒音二等字の音韻變化には異色あるものが少なくない。

く、これについての指摘ないし言及は、従来の研究においてもしばしば行われてきた。しかしながら、それらは概して、断片的で、その變化現象を統一的に把握し、組織的に考察しようとしたものは、あまりなかった。これに關する本格的で有用な論考としては、橋本1973、1974が最初といわなければならない。

したがって、本稿の以下の考察も、正齒音二等字の音韻變化を扱う以上、きわめて啓發的な、この橋本論文を基礎とするものであることは、いうまでもない。

二 正齒音二等字と各種の音韻變化

中古音以後、正齒音二等字が各種の音韻變化をひき起こしたということは、すでに言及した。とすれば、實際にどのような音韻變化が起こったのかということも、はじめにみておく必要があると考えられる。以下は、それについての概畧的な記述である。

(イ) 正齒音二等字の直音化

正齒音二等聲母は、すでにみたように、中古音において、二種類の韻母と結合していた。すなわち、直音である二等韻と拗音である三等韻とである。ところで、この二種の結合のうち、前者についてはとくに問題はないが、後者の場合や重要な變化が起こった。つまり、捲舌音聲母に続くi介音が落とされ(あるいは聲母に吸収され)、消失し、その結果、正齒音二等聲母は、直音の韻母だけと結合することになったのである。たとえば、つぎの(1)と(2)である。

鄉	tsiəu	>	tsən	森	siem	>	sem
瑟	siet	>	set	色	siek	>	sək
生	siəu	>	san				

正齒音二等字の音韻變化と二、三の問題

(ただし、「師」「差」などの場合は、聲母に後續するiは脱落するというより、iと形を變えた。「師」 $\text{ʃi} \rightarrow \text{ʃi} \rightarrow \text{ʃi}$ 、「差」 $\text{ʃa} \rightarrow \text{ʃa} \rightarrow \text{ʃa}$)では、このi介音消失はいつ頃發生したかという点、その明確な時期は、今のところよくわからない。ただ、藤堂1959bにも觸れられるように、日本漢音で正齒音二等字が、i介音をはっきり示さない直音的な読み方をもつことがある(たとえば、「初」 ʃ 、「郷」 ʃ 、「莊」 ʃ 「サウ」 ʃ 「ソク」など)というのは、このi介音の消失あるいは弱化和關係があると考えられる。

(ロ) 正齒音二・三等字の合流

これは、正齒音二等字そのものの音韻變化というわけではないが、關連する音韻事項として、やはり論じておかなければならない。これについては、藤堂明保氏にいくつかの論考がある。すなわち藤堂1952、1959a、1966である。藤堂氏は、これらにおいて、中古以後の正齒音二・三等字の推移、すなわち兩者の對立から併合に至る歴史的過程を考察した。

まず、その合流化が行われる前のそれぞれの音韻の状態はどのようなものであったかという点、聲母においては、正齒音二等字は $\text{ʃ} \cdot \text{ʃ}$ 、 $\text{ʃ} \cdot \text{ʃ}$ 、正齒音三等字は $\text{ʃ} \cdot \text{ʃ}$ 、 $\text{ʃ} \cdot \text{ʃ}$ 、そしてこれに續く韻母の形は、前者は直音、後者は拗音というものであった。ところが、この對立關係は、後者が捲舌音化することによって解消されてしまったのである。

△正齒音二等字 > △正齒音三等字 >

疏	ʃu	>	ʃu	書	ʃu	>	ʃu
搜	neʃ	>	neʃ	收	ʃieʃ	>	ʃeʃ
山	san	>	san	屬	ʃien	>	ʃan
爭	ʃən	>	ʃən	征	ʃien	>	ʃən

また、その合流の時期であるが、文獻的には、明末の『重訂司馬溫公等韻圖經』(1609年)に合流の完了した姿が觀察されるといふことであるから(藤堂1952)、その時期は、十七世紀以前とみなされよう。

しかしながら、右述のような音韻變化によつて、中古の正齒音二・三等字が、ことごとく、捲舌音というひとつの系列に統合されてしまつたのかという点、そうではない。實は、正齒音二等字側でも、ある所では、別途に独自の音韻變化をひき起こしていたため、二・三等字が依然、ちがった發音によつて互いに區別されるといふ状態が存續しているのである。面白いことに、そのちがいは、聲母に表われるとは限らず、韻母に表われる場合もあるし、聲母と韻母の兩方に表われる場合もあるのである。

以下は、そうした對立現象をもたらした、正齒音二等字側の各種の音韻變化である。

(一) 正齒音二等字の非捲舌化

これは、正齒音二等字が、本來の捲舌音を失い、舌尖音(s・ts・s)になつたという變化である。これに關する論考としては、岩田1978がもっとも詳しい。「非捲舌化」という用語は、同氏によるものである。さて、北京語において、正齒音二等字が舌尖音聲母をもつていふ例は少なくない。そのため、正齒音一・三等字は、一方がs・ts・s、他方がst・st・sという形で、互いに區別される場合が、至る所で見受けられるのである。

△正齒音二等字▽△正齒音三等字▽

阻	zǔ	煮	zhǔ
輻	fú	之	zhī
鄉	xiāng	周	zhōu

森	sēn	深	shēn
瑟	sè	失	shī
色	sè	識	shí

ところで、北京語において、すべての正齒音二等字がそろつて非捲舌化したのでは、もちろんない。當然、非捲舌化したものとしなかつたものがあるわけである。ではどのようなものが非捲舌化したかという点、それを詳しく知るには中古音までさかのぼつて考察しなければならぬ。その詳細は岩田氏論文に譲ることとして、ここではごく簡単に言及するならば、中古韻母をいわゆる「内轉」「外轉」の二類に大別した場合(「内轉・外轉」の別は後述)、その非捲舌化は、前者の側を中心に行われただけで、後者の側ではほとんど行われなかつた、ということである。内轉韻母とは、大體e、o、u、iといった高い母音をもつ韻母であるから、おそらくこのような母音の性質が、捲舌音聲母に影響を及ぼして、それを非捲舌化させたといふことであらう。

(二) 正齒音二等字の合口化

これは、とくに二等韻の江・覺韻、および三等韻の陽・藥韻所屬の正齒音二等字(ただし江・覺韻の場合は、舌上音字も含む)に起こつた變化現象で、中古音では「開口」の韻母をもつていたのが、のちにu介音を發達させ、「合口」に轉じたといふものである。

この合口化の結果、たとえば陽韻系統の正齒音二・三等字は、u介音の有無による、つぎのような音韻對立をみせることになる。

△正齒音二等字▽△正齒音三等字▽

莊	zhuāng	章	zhāng
瘡	chuāng	昌	chāng

霜 shuāng 商 shāng

このような合口化發生の理由として、橋本教授は、「捲舌音に自然に伴う唇音化のため」(橋本1974)と説かれる。つまり、捲舌音の調音に自然的にそなわる若干の唇のまるめ、唇のつき出しといった要素が、しだいに發達し、ついにはu介音を現わしたというわけである。

(ホ)正齒音二等字の主母音/a/の變化

これについては、「はじめに」のところで簡単に述べた。すなわち、「現代ペキン語で、本来a)となるべきものが、[a]となっている」(橋本1981, p.246)という音韻變化で、その變化の特異さのためにたいへん注目されるものである。

そこで、この變化の特徴をもっとも典型的に示すものとして、中古音の支・脂兩韻の合口の漢字を掲げてみる。そしてその北京語の發音は、つぎのようになっている。

〈非正齒音二等字〉 〈正齒音二等字〉

追 zhui	水 shui	揣 chuai
隨 sui	規 gui	衰 shuai
飛 fei	類 lei	帥 shuai
位 wei		率 shuai

すなわち、支・脂韻合口字は、その非正齒音二等字の發音から知られるように、一般に、*·ui* (/uei/)、*·ei* (/ei/) となっているのに對し、正齒音二等字だけは、それと反對に *·uai* (/uai/) となっているのである。換言すれば、前者は、中古音以來の内轉系の發音を傳えているのに對し、後者は、いわば外轉系の發音を傳えている、ということになる。

ところで、後者の場合、その韻母の形は、中古音の皆韻、夫韻とい

正齒音二等字の音韻變化と二、三の問題

つた外轉系の合口字(たとえば「隹」*chui*、「嘜」*chui*、「乖」*guai* など)と同一のものであるわけであるが、これは、とりもなおさず、*/ts·ts·s/ + /uai/* という音韻結合において、韻母が特別な */uai/* → */uai/* と變化したものにほかならない。すなわち、内轉韻母の外轉化と稱される音韻變化である。なお、この種の音韻變化については、次節で詳しく論ずることにして、ここでは簡単にこの程度にとどめておく。

(ハ) 個別的な發音現象、とくに「所」の發音について

ここでは、とくに、中古魚韻所屬の正齒音二等字「所」の發音について述べることにする。一般に魚韻の漢字は、現代北京語では、*·no* となるのが通則であって、「所」(*so*) のように *·no* となるのは例外的である。

ところで、この漢字が *·no* となっていることについては、すでに捲舌音聲母を條件とする内轉韻母の外轉化した結果という見方があるわけであるが(橋本1974)、しかし、これには若干疑問が感じられなくもない。なぜなら、「所」以外のはかの正齒音二等字「阻」「初」「助」「梳」などをみると、みな規則的に *·n* をもっているのに、*·no* をもっているという例はひとつもないからである。一般に、内・外轉韻母の合流化ということは、あまり例外をとまわらない、きわめて組織的、体系的に行われるもののようにあるから、「所」だけが單獨で外轉化したというのは、いささか奇異である。そこで、試みに、この漢字の發音に關する筆者なりのささやかな考察を行ってみようと思う。

さて、中古一等韻母は、周知のように、後舌(a, A, o) あるいは中舌(e) といった主母音を含む韻母であるが(ただし、Aは早期にaに合流した)、このうち、主母音aをもつもの一部と主母音oを

もつものは、中古以後、顯著な音韻變化をひき起こし、 $a \rightarrow o \cdot e$ (さらに e)、 $o \rightarrow u$ というように、より高いそして狭い母音に推移した。つぎに、そのように音韻變化した中古一等韻母のいくつかを掲げ、それらの北京語韻母への變化をみてみる。

〈中古一等韻母〉

〈北京語韻母〉

唇音 舌齒音 牙喉音

a	(歌韻)	→	o	uo	e
ak	(鐸韻)	→	o	uo	e
uat	(末韻)	→	o	uo	uo
uai	(泰韻)	→	ei	ui	ui
o	(模韻)	→	u	u	u
ok	(沃韻)	→	u	u	u

以上は、いうまでもなく、規則的に變化した場合である(例字は省略)。ところが、仔細に觀察すると、右の一等韻所屬の漢字のなかには、そのような變化に加わらない、一見例外的な發音をもつものが、いくつも見出されるのである。それらは、およそつぎのようなものである。

〈中古二等韻母〉

〈北京語韻母〉

a	(歌韻)	→	a	(他、大、那、阿)
ak	(鐸韻)	→	a	(摸、落、路)
uat	(末韻)	→	a·ua	(抹、聒、豁)
uai	(泰韻)	→	uai	(外、會、劄)
o	(模韻)	→	o·uo	(模、謨、虜、擗)
ok	(沃韻)	→	uo	(沃)

それで、右の北京語の發音がなぜ例外的であるかを考えてみると、

これらは、結局、前述の $a \rightarrow o$ 、 $o \rightarrow u$ という正規の音韻變化に随わなかったもので、いわば何らかの理由でその變化に逆らって、中古音當時の音價を今日に傳える古い發音(いわゆる archaism)などではないだろうか。もしそうであるとすれば、「所」の發音の場合も、同様の理由から、説明がつくのではないかと思われるのである。

いったい、中古音の三等韻系列の正齒音二等字は i 介音を含むものであったが、それを消失させたあとは、一等韻相當の直音の韻母をもつことになった。魚韻でいえば、その正齒音二等字は一等韻の模韻と合流する格好になったのである。そしてそれ以降は、模韻字と同一歩調をとって $o \rightarrow u$ という規則的變化をたどったわけであるが、たまたま「所」だけはその變化に加わらないで、古い發音を保って今日に至ったものではないかと考えられるのである。とすれば、「所」の發音は、内轉韻母 \rightarrow 外轉韻母という變化の結果生まれたものではなくて、たとえば模韻の「模」 mo 、「虜」 luo などと同じ系列の中古音的な發音だ、というようにもみなされてくるのである。

これで、正齒音二等字に生じた各種の音韻變化についての概観を終える。それらは、ひとつひとつ精細に考察すると、なおいろいろな問題点を含んでいるが、それらの検討はべつの場合にゆずり、以下においては、正齒音二等字における $/e/ \rightarrow /a/$ の母音變化、および関連する音韻現象について、重點的に考察していくことにする。

三 正齒音二等字における主母音 $/e/ \rightarrow /a/$

の變化——會攝、臻深攝入聲字を中心として

現代北京語の韻母には、主母音 $/a/$ をもつものと主母音 $/e/$ をもつものとの二つの大きな類があるが、これに對峙するように、中古中

國語の韻母にも、二つの大きなグループがあったと考えられる。ひとつは、a・A・aなどの主母音をもつものであり、ひとつは、e・o・u・iなどの主母音をもつものである。韻圖の「内轉・外轉」という記載は、そのような中古韻母の二大別を表わしたものと推察されている（頼1958）。

いまこの内・外の區分を、中古音のいわゆる「十六攝」に導入して、これを二分するとうぎのようになる。

内轉系△週・止・流・深・臻・曾・通▽
外轉系△果・假・蟹・效・咸・山・宕・江・梗▽

さて、このように分類された攝のそれぞれに含まれる正齒音二等字を、現代北京語の發音でみたときに氣づく顯著な事實は、内轉側の漢字の發音からうかがい知られる二つの重要な音韻變化であろう。それは、ひとつは聲母の非捲舌化(舌尖音化)であり、ひとつは韻母の外轉化である。そのおのおのについては、すでに若干の説明を試みたのであるが、論述の都合上、後者についてその内容をくりかえして説明するならば、それは、中古音において同一の韻母をもっていたものが、現代北京語に至る間に發音上の分岐が生じ、非正齒音二等字は主母音/e/をもち、正齒音二等字は主母音/a/をもち、というものであった。そして、その分岐の状態をもっとも典型的、具体的に示す例として、支・脂韻(ともに「止攝」所屬)の合口字の發音をみてきた。ここでは、正齒音二等字と非正齒音二等字は、/uai/ : /uei/と對立するということであった。

そこで、ここでは、「止攝」以外の攝に目を轉じ、「曾攝」入聲、「臻攝」入聲合口の場合をみていくことにする。これら二攝の入聲は、中古音において、それぞれ韻尾・*・*・*・*をもつものであった。

正齒音二等字の音韻變化と二、三の問題

まず曾攝入聲の狀況であるが、ここでは、正齒音二等字と非正齒音二等字は、うぎのような音韻對立をみせる。

△正齒音二等字▽

仄 zhai (文 zè.zhè)

得 déi (文 dé)

側 zhài (文 zè.cè)

賊 zéi (文 zè)

色 shài (文 sè.shè)

塞 sei (文 sè)

黑 hai (文 hè)

△非正齒音二等字▽

曾攝入聲字は、一等韻の德韻を中心に口語音と文語音の別が存在し、一般に、口語音・e(/ai/)、文語音・e(/e/)と對立する(表中、文とあるのは文語音であることを示す。以下も同じ)。いっぽう、三等韻である職韻所屬の正齒音二等字もまた、口語音・文語音の別を有するが、この場合口語音・ai(/ai/)、文語音・e(/e/)となっていて、そのうち前者は、外轉系である「梗攝」二等韻入聲字の發音、たとえば「宅」zhai、「窄」zhai、「白」baiなどと同一の韻母グループを形成しているのである。それらは、おそらく、中古以後のある時期に、まず /ts.ʈs. s/ + /ai/ (/ak/) という音韻結合を生み出し、その後、韻母を /ai/ → /ai/ と變化させたものと考えられる。

つぎに、臻攝入聲の狀況をみてみる。ここには開口と合口の二系列がそろっているが、面白いことに、正齒音二等字の音韻變化は開口と合口との間で、かならずしも平行的には進まなかった。すなわち、次表のごとくである。

△臻攝・開口▽

瑟 shì (文 sè)

率 shuài (文 shuò)

蝨 shì (文 sè)

蟀 shuài (文 shuò)

帥 shuài (文 shuò)

△臻攝・合口▽

ここでも、會攝入聲と同様、口語音と文語音の明りよな對立が認められ、合口では口語音 /uai/、文語音 /ue/、開口では口語音 /i/、文語音 /e/、と對立すると考えられる。開口側の發音をこのように分類するのは、「融」がもつ二音のうち、shi (/i/) を口語音、se (/e/) を文語音とみなすからにはかならない。「融」の發音 se は Goodrich 1923 による。したがって、この分類でいくなれば「悉」の發音 se、she も文語音系ということになる。

さて、右の表から明らかなように、臻攝入聲においては、主母音 /e/ → /a/ の變化が進行したのは合口の口語音の場合だけであり、開口では、口語音でもそのような變化は起こらなかった。そして、その變化の進行過程は、おそらく會攝の場合と同様で、まず韻尾において i が發生し (/tet/ → /ten/)、ついで止攝合口字と平行するかたちで /uai/ → /ui/ となったものと考えられる。

以上はすべて、北京語に基づいた觀察結果である。しかしながら、正齒音二等字における右述のような變化は、もちろん、北京語だけの特有の現象なのではない。實は、北京語以外にも、同様の現象が見出される方言は存在するのである。いまそのような方言として、洛陽方言(河南省)、河間方言(河北省)を擧げることが出来る。これらの方言から知られる音韻的事實で、とくに注目し値するのは、問題の音韻變化が會攝入聲だけでなく、「深攝」入聲(韻尾・p をもつ)、および「臻攝」入聲開口においても、同様に觀察される、ということである(佐藤 1979)。そこで、この二方言から拾い集めた發音例をまとめて示すと、次表のようになる。比較のため、會攝側の漢字とその發音も、いっしょに掲げておく。

△深攝▽

△會攝▽

澁 sai (洛)

側 tsai (洛・河)

△臻攝・開口▽

色 sai (洛・河)

悉 sai (河)

齋 sai (河)

融 sai (洛)

(表中、洛は洛陽方言、河は河間方言を示す。趙 1959⁶⁰⁾ 張 1922 参照。ちなみに、深攝には開口があるだけで合口はない)

さて右の表を一瞥して直ちにわかることは、深・臻攝の漢字「澁」「悉」なども主母音 /a/ をもっており、しかも韻尾には「i」があつて會攝字とまったく平行した形になっている、ということである。この點、北京語と大いにことなるところで、おそらく、それらは、中古音以後 /ap/ → /ai/ → /ai/ → /at/ → /a/ → /ai/ という變化を辿つたものである。このようにみると、正齒音二等字に生じた /e/ → /a/ の母音變化というのは、かなり組織的、系統的に生じた、きわめて一貫性のある現象だということが、わかってくる。その意味で、「澁」「齋」などを se と發音するという方言例は、まことにユニークなもので、音韻史的にもたいへん貴重な存在だといわなければならない。

以上、北京語および洛陽・河間方言の例を中心として、正齒音二等字における主母音變化、すなわち韻母の外轉化という現象をみてきた。ところで、ここで、さらに言及しておかなければならないことがある。それは、韻母の外轉化といっても、そのような變化は、實際には一部の攝、一部の音節にしか起こらなかった、もう少し具體的にいうと、同じ内轉系でも、韻尾に u をもつもの、韻尾に $\text{u} \cdot \text{u} \cdot \text{u} \cdot \text{u}$ をもつもの場合は、たといその主母音が /e/ であっても、變化は起こらなかった、ということである。この相違は、いっただいどう説明

されるのであろうか。つぎにこの点について、若干の考察を試みてみる。

今までのところ、この種の變化現象に言及したものとしては、橋本 1973、1974 があり、ここでは、それについては、捲舌音という特定の音聲的環境のもとで起こった音韻變化、というように説かれている。しかし、筆者は、それだけではなく、それに加えて韻尾が *i* になっているということが、この變化のもうひとつの要因になっているのではないかと推測するのである。もしこの点を併せ考えるならば、前述の方言間の發音上の相違、對立は、つぎのように説明されて、たいへん好都合であると思うのである。すなわち、

會攝入聲字が北京語口語音でも洛陽方言でも /e/ → /a/ となったのは、韻尾變化が $\cdot k \rightarrow \cdot i$ であつたためであり (「色」 $\text{sik} \rightarrow \text{sek} \rightarrow \text{sei} \rightarrow \text{sei}$)、いっぽう、臻・深攝入聲字が、洛陽方言では /e/ → /a/ となつたのに北京語口語音ではそうならなかつたのは、韻尾變化が互いに相違し、前者では $\cdot t \rightarrow \cdot i$ 、 $\cdot d \rightarrow \cdot i$ であつたのに對し (「悉」 $\text{stet} \rightarrow \text{sei} \rightarrow \text{sei}$)、後者では $\cdot t \rightarrow \cdot \emptyset$ (t 脱落)、 $\cdot d \rightarrow \cdot \emptyset$ であつたからである (「驢」 $\text{stet} \rightarrow \text{stet} \rightarrow \text{stet}$) と。

ではなぜ、聲母が捲舌音で韻尾に *i* がある場合、主母音 /e/ → /a/ の變化が起り得たのか。筆者は、それは、主母音 /e/ の「短・弱」の性質によるのではないかと推察するのである。中國語には、上古音以來傳統的に、主母音 /e/、/a/ をもつ韻母の對が存在するが、この二つの主母音の間には、韻尾との關係で、強さあるいは長さの違ひがあり、前者は「短・弱」、後者は「長・強」という對照をなしているのである (類 1958)。

ところで、中國語において、捲舌音 /ts·tʂ·s/ と主母音 /e/ の

結合、あるいは主母音 /e/ と韻尾 *i* の結合というのは、それなりに安定性を保つけれども、主母音を *h* さんでその前後に捲舌音聲母と韻尾の *i* が竝立するというかたちは、あまり安定的ではないと考えられる。なぜなら、捲舌音と母音の *i* という音は、音聲的になじみにくい開柄であり、この二者が主母音 /e/ を介してならんだとすると、その主母音の「短・弱」性のため位置的な接近が行われるであろうが、またいっぽうでは互いに反撥し合つて、相手を遠ざけようとするであろう。そのような場合、聲母と韻尾の間をある程度引き離し、兩者の音的バランスを保つためにも、その中間に立つ主母音は、「短・弱」であるよりは「長・強」であるほうが望ましい。おそらくこのような調音意圖が働いて、主母音 /e/ → /a/ の移行が推進されたのではないだろうか。

以上によつて、筆者は、捲舌音聲母のもとでの主母音變化に、*i* 韻尾の存在が密接に關連している、と想定するわけである。

四 正齒音二等字における主母音變化の

現象と方言分布

前節では、とくに會攝と臻深攝の入聲字を中心として、正齒音二等字の主母音變化の状況をみてきた。その觀察の結果、北京語口語音と洛陽・河間方言 (以下洛陽方言で代表させる) の間には、變化の特徴に關し著しい相違があることがわかつた。その相違点を要點的に示すと次表のようになる。表中の韻尾變化の別とは、入聲韻尾が *i* になるか \emptyset になるかの別を示し、母音變化の有無とは、主母音 /e/ → /a/ の變化があるかないかを示している。

(a) 北京語口語音の場合

會攝	韻尾變化の別	母音變化の有無
臻深攝	·k > ·i ·t > ∅ ·p > ∅	有 無

(b) 洛陽方言の場合

會攝	韻尾變化の別	母音變化の有無
臻深攝	·k > ·i ·t > ·i ·p > ·i	有 有

まず右の表からいえることは、北京語口語音と洛陽方言とは、臻深攝において決定的に相違する、ということである。すなわち、兩者は、韻尾變化の點でも、主母音變化の有無についても、大幅に相違するのである。したがって、この點によつて、北京語口語音と洛陽方言とは、畫然と分離されるとしななければならない。

ところで、北方語諸方言を分類するさいの基準といえは、もつとも基本的なものとして、中古入聲の聲調變化がある。これは、中古入聲がその子音韻尾を完全に變化消失させた場合、のちにどのような種類の聲調をもつに至ったか、あるいは既存のどの聲調に合併したか、によつて方言を分類するものであるが、参考までに、北京語口語音および洛陽方言における入聲變化の状況をみてみると、大體つぎのようになつていて、この點からも、兩方言は截然と區別されることが知られるのである。

中古入聲 方言	清入聲	次濁入聲	全濁入聲
	北京口語音	上聲(陰平)	去聲
洛陽方言	陰平	陽平	陽平

つづいて、ふたたび北京語の發音に目を轉じ、こんどはとくに口語音側の發音だけを考察の對象とすることにする。すでに論述したように、北京語の口語音では、會攝入聲の正齒音二等字と臻深攝入聲の正齒音二等字との間にはきわだつた差異があり、前者は /tʂ/、後者は /tʂ/ と對立するということであつた。すなわち、つぎのごとくである。

會攝	臻深攝
仄 tʂi	悉 —
側 tʂai	蟲 shi
色 tʂai	澁 —

「悉」「澁」に *ʂe*, *ʂe* といった發音も存在することは前述したが、これらは文語音系列であるという理由で、表からは除かれた。

ところで、北京語口語音に觀察される右のような音韻對立とほとんど軌を一にする音韻對立を内包する方言が、實はほかにも存在するのである。それは昌黎方言(河北省)である。さてこの方言からうかがい知られる音韻對立というのは、つぎのようなものである(昌黎方言誌「1960」)。

會攝	臻深攝
仄 —	悉 —
側 tsai	蟲 si (/si/)
色 sai	澁 si (/si/)

すなわち、會攝/a/、臻深攝/ɛ/という對立になっていて、北京語口語音とはほとんど平行した状態を呈しているのがたいへん注目されるわけである。この方言で「融」「澁」がɛとなつてゐるのは、本來はsɛであつたのがs→s̄と舌尖音化した結果であろうと考えられる。というのは、この方言では、正齒音二等字は、中古の内轉・外轉の別なく、一律に舌尖音のs̄・s̄・s̄をもっているからである。

さらに、以上と關連して、興味深いのは『中原音韻』(1324)である。同書は、元代のある北方中國語の實際の言語音を寫した音韻資料として著名なものであるが、そこにおいても、上述の北京語口語音、昌黎方言と同じタイプの音韻對立を見出すことができるのである。それはつぎのようなものである。

〈會攝〉 仄 ɬai 瑟 ʃi
 側 ɬai 融 —
 色 ʃai 澁 ʃi

『中原音韻』では、「側」「色」などは「皆來韻」、「瑟」「澁」は「支思韻」というように、互いに所屬がことなつてゐるので、それによつて、前者が/a/、後者が/ɛ/であることが容易に知られるのである。ちなみに、「瑟」「澁」については、「史」と同音という注記がみえる。

以上みてきたことを総合すると、北京語口語音、昌黎方言、『中原音韻』の三者は、きわめて一致した音韻特徴をもつてゐるということである。すなわち、會攝/a/、臻深攝/ɛ/という音韻對立である。したがつてこの點を基礎として言ひうることは、要するに、これら三種の方言はたいへん親密な關係があるのではないかということである。

正齒音二等字の音韻變化と二、三の問題

このことは、從來ほとんど問題にされることはなかつたけれども、今後『中原音韻』の基づいた實際の方言を究明しようという場合、きわめて重要な意味をもつてくると思われるのである。ちなみに、中古入聲の聲調變化を參看すると、三者ともきわめて近似した傾向を有し、つぎのような對應關係になつてゐるのである。

中古入聲	清入聲	次濁入聲	全濁入聲
	北京口語音 昌黎方言	上聲(陰平)	去聲
方言	上聲	去聲	陽平
『中原音韻』	上聲	去聲	陽平

五 通攝屋韻の正齒音二等字「縮」の發音について

「縮」という漢字は、中古音の「通攝」入聲に所屬する數すくない正齒音二等字のひとつである。この漢字の發音はやや複雑で、大阪外大[26]によると、北京音として三通りの發音があることが知られる。すなわち、文語音としてのsɛ、口語音としてのs̄ɛ、そしてもうひとつshàoの三音である。このうち最初のs̄ɛに關してはとくに言う必要はない。ここで取り上げようとするのは、それ以外のsuoとshàoという二種の發音についてである。

さて、通攝入聲字は、現代北京音と、一般につぎのように對應する。

oūk (屋韻) → u (木 hū, 族 zú, 哭 kù)
 ok (沃韻) → u (督 dū, 酷 kù)
 iauk (屋韻) → u (福 fú, 陸 lù, 祝 zhù)

〃	→·ü (蚰 nü' 菊 jú' 育 yù)
〃	→·ou (軸 zhóu' 粥 zhóu' 肉 ròu)
〃	→·iu (鈕 niǔ' 六 liù 宿 xiǔ)
iok (燭韻)	→·u (錄 lù' 足 zú' 觸 chù)
〃	→·ü (絲 sī' 曲 qū' 欲 yù)

これに對し、正齒音「縮」だけは、文語音の su を除くと、右のいずれの音韻對應にも屬さない、たいへん特異な存在になっているのである。この suó あるいは shao という音は、いかなる性格のものなのか、その發音の成立について、若干述べてみたい。

はじめた、Karlgren (高本漢) 1962 所收「方言字彙」に依つて、「縮」の各地方言音を調べてみる。ただし「縮」だけを獨立に掲げてみるも、その音韻特色を明確に把握することは難しいので、比較對照のため、へつこの「齒音」字である「朔」(江攝・覺韻)、「索」(宕攝・鐸韻)、「叔」(通攝・屋韻)の三字とその發音をも併せ掲げる。「朔」は「縮」と同じ正齒音二等、「索」は齒頭音、「叔」は正齒音三等の漢字である。

	「縮」	「朔」	「索」	「叔」
北京	so	suó	so	su
福州	sauk	sauk	sauk	soeyk
上海	so · sɔ	sɔ	sɔ	so
開封	so	suó	so	su
懷慶	suá	suá	—	ens
歸化	suɛ	suɛ	suɛ	suɛ
大同	suá	suá	suá	suó
太原	suá	suá	suá	suá

興縣	sua	sua	sa	sua
太谷	fa	fa	sa	fe
文水	sua	sua	sa	sua
鳳臺	sua	sua	sua	sua
西安	fo	fo	so	fu

右の表は、「縮」などの四字についての方言音の對比であるが、それを通観して容易に氣づくことは、多くの方言で「縮」が、同じ通攝の漢字よりも、江攝の「朔」、宕攝の「索」と一類をなしているという事實である。そして、ついでに、これら四字の發音の相互關係を、福州・上海以外の方言(いわゆる北方語諸方言)についてわかりやすくまとめてみると、つぎのようになる。

〈縮・朔・索〉	〈叔〉	方言
(a) ·o (朔·uo)	·u	開封、北京
·o	·u	西安
(b) ·ua	·ua	懷慶、太原、鳳臺
·ua (索·a)	·ua	文水
·ua	·uo	大同
·a	·e	太谷

つまり、大部分の方言は、右に示したように(a)(b)二種のグループに大別されるわけであるが、そのいずれの方言グループにおいても、「縮」の發音が「朔」や「索」とほとんど區別なく同一類に入るということは、著しい現象として大いに注目されるのである。

しかしながら、筆者にとってそれ以上に興味深く感じられるのは、太原・文水・大同など(b)グループの方言において、「縮」が「朔」「索」と平行して/a/という母音をもっている、ということである。

このことは、言うならば、通攝においても、捲舌音聲母のもとでの韻母の外轉化ということが行われたことを物語るものといえよう。つまり、「縮」は、そうした音韻變化を経た結果として、發音上、右江攝と合流したかたちを呈しているのだ、と考えられるわけである。

それでは、その變化の過程は具體的にどのようなものであったかといふと、まず「縮」の中古音時代の主母音を \circ (あるいは u) であったと想定すると、その後の音韻變化は $\circ \rightarrow \text{p}$ (あるいは $\text{p} \rightarrow \text{o} \rightarrow \text{e}$) のごとくであったのであろう。これは、前述した「色」「瑟」などに起こった主母音 $\text{e} / \rightarrow \text{a} /$ の變化とは、いささか内容をことにするものであるけれども、方言によってはそのような變化のしかたもありえたのだと考えざるをえない。「縮」はこうして韻母を外轉化させたのち、いわば右江攝字と同一歩調をとるようになり、さらにつぎのような變化過程を辿ったものと考えられる。すなわち、(a) 方言では、
 $\text{sak} \rightarrow \text{sk} \rightarrow \text{sk}^? \rightarrow \text{so} \rightarrow \text{so}$ (suo)
そして (b) 方言では、

$\text{sak} \rightarrow \text{sawk} \rightarrow \text{suak} \rightarrow \text{suak}^? \rightarrow \text{sua}$

さて以上において、「縮」の外轉化、すなわち右江攝への合流化ということ、そしてそれが、北方語諸方言ではきわめて普遍的な現象である、ということを見てきたわけであるが、この點に關してはやはり北京語も例外ではないと考えるべきであらう。すなわち、北京語に「縮」の發音として $\text{su} \circ$ があるのは、右に示したような外轉化をした結果なのであり、北京語にそのような發音が存在することはきわめて當然なことなのだ、といえるわけである。

では、「縮」に行われているもうひとつの發音 shao はどうであるか。まずこの發音が北京語でどういう意味で用いられているかとい

うと、大阪外大1965によると、「家畜を後退させる時に發する聲」と説明されている。しかしながら、今日一般に通行している各種の北京語の辭典類を参照してもこの音の記載はほとんど見當らないから、北京で行われているとしても、きわめて土語性の強い語であることは疑いない。

ところで、この種の發音が、北京以外の地域ではどうかであるのか調べてみると、豫想に反して、多くの方言に廣く分布していることが知られる。すなわち、以下のごとくである。

まず昌黎方言では、北京語と同様、家畜を後退させる時にこの音を發するということである(『昌黎方言誌』p. 288)。ただし、實際には $\text{sau}^?$ と發音する。

つぎに、橋本1975によれば、崇禮・尙義方言では「縮」について三種の發音が行われているということである。すなわち、 $\text{sue} / \text{(suo)}^? / \text{suan} / \text{(souang)}^? / \text{sau} / \text{(sao)}$ (聲調の表示は省略) の三音であるが、このうち三番目のものが、問題の發音にはかならない。

さらに、熱河方言でもこの發音が行われている。この方言の文法を詳しく記述した Mullie 1932 によると、 shao (去聲) という音は、*"to give way"*、*"to shrink"* という意味の動詞として使われているようである(同書 Vol. 2, p. 560)。實際の用例を挙げると、
① 把你們那個車往後縮縮，我這個車就過去了。
② 你往後縮縮。

このように、北京語を含めると結局四地點で、「縮」について、 shao あるいは sau といった平行した發音が行われているという状況が存在することが知られるのであり、したがって、これだけの方言

例がそろっているとすると、これを個別方言の單なる例外發音、不規則發音として片づけるわけにはいなくなってくる。そこで、筆者としては、これも、實はたいへん規則的な音韻變化の結果生まれた發音であるとみなし、その變化の過程は、前述と同様、まず主母音が $o \rightarrow a$ となり、ついで $sak \rightarrow sawk \rightarrow sau$ (∇sau) と進化したものと考えるのである。というわけで、ここにも「縮」における韻母變化のもうひとつのかたちを觀察することができるのであり、そして、これを、内轉韻母の外轉化の一種として位置づけることは問題がないであろう、と思うのである。

六 おわりに

以上、正齒音二等字を對象にして、その特異な音韻變化を論じてきた。前半部においては各種の音韻變化を概観し、後半部においては、いわゆる内轉韻母の外轉化の諸現象を考察した。これで、従来の研究であまり追究されることのなかった二、三の問題点をやや明らかにしえたと思う。しかし、個々の問題に對する説明・解釋にはいまだ不備な點もすくなくないと思われる。事の大小を問わず御教示いただければ幸いである。

注(1) 「齒音聲母の分類とその音價は、李榮 1956 所載の「切韻聲母表」(p. 128) を参考にした。

(2) 現代北京語の發音は、原則として「漢語拼音字母」を用いるが、必要の場合には、音韻表記(/ / で括弧) を示すこともある。

(3) 中古韻母の音價は、平山 1967 「中古音の音價表」の中の「韻母の音價表」(pp. 146-148) に従う。なお、三等韻母の介音については、口蓋的なものと非口蓋的なものの二種があったとする説が一般に行われているが、

本稿の中古音表記では、便宜上この區別を省略し、簡單に i だけを用いていく。

- (4) また、河野 1988 によれば、朝鮮漢字音で正齒音二等の一部の漢字、たとえば「森」「簪」「色」がそれぞれ, $sa:m$, $ca:m$, $sa:p$, $sa:k$ となっているのは、中國原音における i 介音消失後の状態を寫したものとされる。(5) 『廣韻』などの韻目を掲げる場合、原則として、平聲と入聲の韻目だけを記し、上・去聲の韻目は平聲のそれに含ませることとする。以下も同様。(6) 北京語の韻母 o ・ no ・ e はそれぞれ / no /・/ ne /・/ e /・/ ei ・ ui はそれぞれ / ei /・/ nei / と解釋される。(7) 「抹」に $m\acute{o}$ ・ $m\grave{o}$ のほかに俗語音として $m\ddot{a}$ という音があること、また「豁」に $hu\acute{o}$ ・ $hu\grave{o}$ のほかに $hu\ddot{a}$ という音があることは、大阪外大 1949 によって知られる。

(8) 「所」の發音は、多くの北方諸方言では $su\acute{o}$ あるいは $su\grave{o}$ であるが (Mullie 1982 によれば、熱河方言では $su\acute{o}$ ・ $su\grave{o}$ の二音とも行われている)、『中原音韻』をみると、この漢字の發音は su である。

(9) 外轉系所屬の攝は九攝あるが、このうち果攝と假攝、宕攝と江攝をそれぞれひとつに併せることが多い。

(10) 趙月朋 1959 によれば、洛陽方言の單語のなかに、つぎのような發音が見える。「臭風」 $ch\acute{o}us\grave{a}n$ 「聲王不讀」 $s\grave{a}i\ w\acute{a}ng\ b\ddot{u}z\ddot{y}i$ 「色氣」 $s\grave{a}i\ q\ddot{i}$ 「側標」 $z\grave{a}i\ l\acute{e}ng$ 。

(11) 筆者は一九七九年の論文において、北京語口語音と洛陽方言とを、互いに親近な關係にあるものと推論したが、この見解は、現在では修正されなければならないと考えている。

(12) 北京語口語音における入聲變化については平山 1967、また洛陽方言のそれについては趙 1958 を参照された。

(13) 「聲」の口語音として「聲」と同じ se という音が期待されるが、北京語としては見當らない。ただし河間方言ではこれを se と發音するという

ことであるから、これは $si \rightarrow si$ と變化した形だと考えられる(張 1932 参照。ただし原文は注音符號)。

(4) 屋韻(三等)所屬字が韻母 $\cdot u$ 、 $\cdot u$ のほか $\cdot ou$ 、 $\cdot iu$ をもちの場合、前者は文語音、後者は口語音とされる。

六 ia (文) ia (口)

熟 shu (文) $shou$ (口)

軸 zhu (文) $zhou$ (口)

(5) 正齒音二等字としての「縮」は、中古音末期におおむねほとんども介音を失い、一等韻母化していたと考えられる。したがってその段階で、主母音は o (あるいは u) となっていたと考えられる。

〔参考文献〕

『昌黎方言誌』1960 河北省昌黎縣誌編纂委員會・中國科學院語言研究所合編、科學出版社、北京。

Goodrich 1923 "A Pocket Dictionary (Chinese-English) and Pekingese Syllabary", Presbyterian Mission Press, Shanghai.

橋本萬太郎 1973 "Retroflex endings in Ancient Chinese", *Journal of Chinese Linguistics*, 1. 2, pp. 187-207.

——1974 「朝鮮漢字音と中古中國語高口蓋韻尾」、『マシマ・アフリカ言語文化研究』7, pp. 53-74.

——1975 「中國語崇禮・尙義方言音字彙」、『アジア・アフリカ言語文化研究』9, pp. 144-164.

——1981 『現代博言學』大修館書店、東京。

平山久雄 1960 「中古入聲と北京語聲調の對應通則」、『日本中國學會報』第十二集, pp. 139-156.

——1967 「中古漢語の音韻」、『中國文化叢書』1《言語》所收, pp. 112-166. 大修館書店、東京。

岩田禮 1978 「古齒音と等聲母の非捲舌化について」、『中國語學』225, pp.

正齒音二等字の音韻變化と二、三の問題

9-19.

Karlgren (高本漢) 1962 『中國音韻學研究』(趙元任・羅常培・李方桂合譯)、臺灣商務印書館、臺北。

河野六郎 1968 「朝鮮漢字音の研究」、『天理時報社、奈良。』、『河野六郎著作集』2, 1979. 平凡社、に收める。

李榮 1956 『切韻音系』、語言學專刊第四種、科學出版社、北京。

Mullie 1932 "The Structural Principles of the Chinese Language, An Introduction to the Spoken Language (Northern Pekingese Dialect), Peiping.

大阪外大 1949 大阪外國語大學中國語學研究室編『中國語發音字典』。

賴惟勤 1958 「中古中國語の内・外について」、『お茶の水女子大學人文科學紀要』11, pp. 31-59.

佐藤昭 1979 「北京語の口語音と文語音——特に中古中國語の會・梗攝一・二等入聲字を中心として」、『橫濱國立大學人文紀要』(第一類、語學・文學) 26, pp. 22-33.

藤堂明保 1952 「官話の成立過程から見た西儒耳目資」、『東方學』5, pp. 99-129.

——1959 a 「北京語の捲舌音の成立について」、『中國語學』91, pp. 5-6.

——1959 b 「吳音と漢音」、『日本中國學會報』第十一集, pp. 113-129.

——1966 「北方話音系的演變」、『中國語學』162, pp. 1-11.

張洵如 1932 「河間方言一變」、『國語週刊』第五十六期。

趙月朋 1958 「洛陽話淺說」、『方言與普通話集刊』第二本, pp. 35-69. 文字改革出版社、北京。

——1959 「洛陽方言詞匯」、『方言與普通話集刊』第六本, pp. 68-102. 文字改革出版社、北京。

(付記) 本稿は、中國語學會第31回大會(一九八一年十一月七日、於東洋大學)で發表したものに若干整理・補足を加えたものである。